

3 ジェンダーからみる生活満足度に与える要因

崔 藍心

3.1 はじめに

現在各大学では授業の質を高めるため力を尽くしている。牧野・森(2001)によると、少子化による子供の減少の影響を受け、特に私立大学においては、学生確保のために授業制度の見直し、授業の改革、カリキュラムの改正などの教育革命が進められているという。さらに、最近では多くの大学で学生にアンケート調査を行い、それに基づいて学生の生活満足度を高めるべく、工夫を凝らしているようだ。

生活の満足度を含む大学生の生活実態調査には数多くの先行研究が存在する。ここでは、研究のベースとなる先行研究を紹介していく。牧野・森(2001)は、大学生活への満足度に関して授業への満足度、付加価値への満足度、物理環境への満足度という三つの種類に分けてさまざまな分析を行った。その結果、大学生活に対する総合満足度について、「非常に満足している」という学生は全体の2%にすぎなかった。この調査は主に1、2年生を対象としたものであり、卒業したばかりの4回生の学生が大学生活を振り返ってみた時、一般的に満足しているかどうかについては触れていない。満足感というものは、時間の流れに従って変わるものである。

そこで、本稿では卒業したばかりの4回生の学生が大学生活を振り返ってみた時、一般的にどれほど満足しているかを分析したい。そして、その生活満足度はどのような要素によって影響を受けているのだろうかということを検討したい。またそれは男女によって違いがあるのかも調査したい。以上が本稿の目的である。

3.2 仮説

大学における学生の生活満足度は、主に学校外と学校内の影響を受けることによって、異なるだろう。学校外の要因として予測されるのは経済状態をあらわす「経済力」である。一般的に経済力がある人のほうが経済力がない人よりは生活に満足しているだろうと思われる。また、浦川邦夫・松浦司(2007)は、日々の生活の満足感に影響を与えるのは、所得・資産・階層といった社会・経済変数の現在の水準であると述べている。したがって、「一般的に経済状況が優れている学生であるほど、生活に満足している」と一つ目の仮説を立てる。

次は学校内の要因として捉えられるのは、「GPA」と「向上した能力」である。「GPA」は大学4年間の勉強を通して得た知識の証拠である。学生にとって成績は非常に重要であると思われる、「GPAが高い学生であるほど生活に満足している」と二つ目の仮説を立てる。

また、大学は学生が勉強する場所であり、勉強を通して能力を向上させる場所なので、

大学での能力向上と生活満足度は関連があるだろうと考えられ、能力が向上したと思う学生であるほど、生活に満足していると三つ目の仮説を立てる。

最後は、性別は基本的な属性なので、満足度に影響を及ぼす可能性があると思われる。また、浦川邦夫・松浦司(2007)によると、男性、女性のサンプルで生活満足度に与える影響が異なる変数がみられたという。したがって、ここでも男女別で差があるのではないかと、考える。

3.3 データと変数

今回の分析に使用するデータは2009年3月20日の卒業式の日に行われた卒業生に関する調査である。これは同志社大学社会学部卒業生を対象に行ったものであり、サンプル数は441であった。

従属変数となる生活満足度には「学生生活を振り返ると、全般的に満足できるものでしたか」という質問項目を使用する。この項目では満足度が「満足」「どちらかといえば満足」「どちらともいえない」「どちらかといえば不満」「不満」の5段階で測定されているが、調査実施の日が卒業式という特別な日であったため、回答のほとんどが「満足」と「どちらかといえば満足」の方に偏っている。したがって、「満足」を「高満足」とし、「どちらかといえば満足」「どちらともいえない」「どちらかといえば不満」「不満」を「低満足」として分析に用いることにする。

独立変数は大きく分けて「経済状態」「GPA」「向上した能力」3つである。

一つ目の独立変数となる経済状況には、「あなたのご実家の経済状態は、この中のどれにあたるでしょうか」という質問項目を使う。「豊か」「やや豊か」「ふつう」「やや貧しい」「貧しい」の五つの項目を、前の二つは「豊かである」とし、後ろの三つは「豊かでない」の二つに分けた。

二つ目の独立変数は「あなたのGPAはどれくらいですか」を大学での成績とした。この項目ではGPAが六段階で測定されているが、これを「上」「中」「下」の三つに分けて分析に用いる。

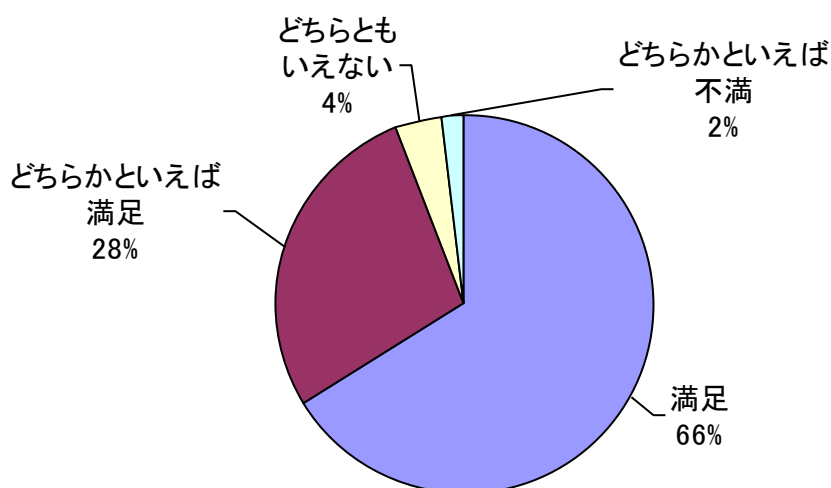
三つ目の独立変数となる「向上した能力」には、「大学に入学した時点と比べたとき、次にあげる知識や技能は、授業を通してどのくらい向上したと思いますか」という質問項目を使う。具体的に「根拠を示し簡潔に書く能力」「自分の考えや意見を人にわかりやすく伝える能力」「1つのものごとを複数の視点から考える能力」「文献や資料を読み解く能力」「必要な文献や統計資料を探すスキル」の五つの項目である。向上した能力をはかるこれらの五つの項目間の相関係数の範囲は0.273~0.552である。またこれらの五つの項目は、大学での授業を通して能力が向上できる、論理的でも一番近い学問である。したがって、これらの五つの項目を合計して総合的に「向上した能力」という変数を作った。度数の偏

りを防ぐのとクロス表での分析がしやすいように、合計した数値を二段階に分割した。数値は5～15であり、5～9を「向上した」、10～15を「変わらない・低下した」とした。

3.4 分析

(1) 事実確認

図1 大学生生活満足度



まずは学生がどれほど大学生生活に満足しているのかという事実確認を行う。図1は生活満足度を見たものである。生活に「満足」している学生は66%で、これは先行研究の長岡大学(2001)における学生の生活満足度と比べると比較的高い数値となっている。「どちらかといえば満足」28%、「どちらともいえない」4%、「どちらかといえば不満」2%、「不満」0%である。卒業生はかなり大学生生活に満足しているのである。

表1 性別と生活満足度のクロス表

	生活満足度		合計 (N)
	高満足	低満足	
男性	61.8	38.2	100.0 (152)
女性	70.1	29.9	100.0 (201)
合計	66.6	33.4	100.0 (353)

$\chi^2 = 2.684$ d.f. = 1 p = 0.101

表1は性別ごとの生活満足度を表したものである。男性の高満足度は61.8%で、女性の高満足度は70.1%である。女性の方が男性よりさらに「満足」している結果となっている

が、統計的に有意ではない。

(2) 経済状態と生活満足度の関連

表 2 経済状態と生活満足度のクロス表

		生活満足度		合計 (N)
		高満足	低満足	
経済状態	豊かである	72.4	27.6	100.0 (163)
	豊かでない	60.7	39.3	100.0 (191)
合計		66.1	33.9	100.0 (354)

$\chi^2 = 5.336$ d.f. = 1 p = 0.021

表 2 は経済状態と生活満足度の関連をクロス表でみたものである。経済状態と生活満足度には関連があることがわかる。経済状態が豊かである学生の方が生活に満足しており、逆に経済状態が豊かでない学生のほうが満足していない傾向がある。

表 3 性別と経済状態と生活満足度のクロス表

		生活満足度		合計 (N)
		高満足	低満足	
男性	豊かである	62.5	37.5	100.0 (64)
	豊かでない	60.9	39.1	100.0 (87)
	合計	61.6	38.4	100.0 (151)
女性	豊かである	78.6	21.4	100.0 (98)
	豊かでない	62.4	37.6	100.0 (101)
	合計	70.4	29.6	100.0 (199)

$\chi^2 = 0.039$ d.f. = 1 p = 0.844
 $\chi^2 = 6.255$ d.f. = 1 p = 0.012

表 3 は男女別に経済状態と生活満足度について見たものである。女性の場合は経済状態と生活満足度には関連がみられているが、男性の場合は関連がみられていない。女性の場合は豊かである学生の方が生活に満足しており、豊かでない学生の方は授業に満足していないといえるが、男性の場合は豊かである学生のほうが生活に満足しているとはいえない。

したがって、女性は男性より安定性を求める生活を送ろうとしている傾向がみられる。経済的な指標は安定的な生活を示し、現在の生活がいかに安定しているかを指す指標は、実家の経済状態である。浦川邦夫・松浦司(2007)は、女性の場合、「自分と属性が類似した人達との経済力の差」が生活満足度に大きな影響を与えると指摘している。

(3) 大学での成績と生活満足度の関連

表 4 GPA と生活満足度のクロス表

	生活満足度		合計 (N)
	高満足	低満足	
上	74.5	25.5	100.0 (94)
中	65.0	35.0	100.0 (103)
下	61.7	38.3	100.0 (141)
合計	66.3	33.7	100.0 (338)

$\chi^2=4.211$ d.f. = 2 p = 0.122

表 4 は大学での成績と生活満足度について見たものである。二変数間の関連は強くないが、成績順位と生活満足感の間には関連が見られる。成績が良い学生ほど生活に満足している。

表 5 男女別の GPA と生活満足度のクロス表

		生活満足度		合計 (N)
		高満足	低満足	
男性	上	81.3	18.8	100.0 (16)
	中	60.5	39.5	100.0 (43)
	下	57.6	42.4	100.0 (85)
	合計	61.1	38.9	100.0 (144)
女性	上	75.0	25.0	100.0 (76)
	中	67.8	32.2	100.0 (59)
	下	69.1	30.9	100.0 (55)
	合計	71.1	28.9	100.0 (190)

$\chi^2=3.167$ d.f. = 2 p = 0.205 (男性)
 $\chi^2=0.983$ d.f. = 2 p = 0.612 (女性)

表 5 は男女別で成績と生活満足度について見たものである。独立性の検定によると男女とも成績と生活満足度に関連があるとはいえない。また男性であれ女性であれ成績が良い学生であるほど生活に満足しているともいえない。全体的にみると成績が良い学生ほど生活に満足している傾向が示されたが、有意な結果にはなっていない。また、これを男女別にみても関連はみられなかった。

つまり、大学での成績と生活満足度を関連をみてみたら、GPA が高い学生であるほど生活に満足しているという仮説は支持されなかった。学校内の1つの要因である GPA は、実際学生の生活満足度に影響を及ぼしてないことが明らかになった。次に考慮するのは、学校内の要因であるもう一つの変数「向上した能力」である。それでは、向上した能力と生活満足度は関連がみられるのだろうか。

(4) 向上した能力と生活満足度の関連

表 6 向上した能力と生活満足度のクロス表

	生活満足度		合計 (N)
	高満足	低満足	
向上した	70	30	100 233
変わらない・低下した	56.9	43.1	100 116
合計	65.6	34.4	100 349

$\chi^2=5.855$ d.f. = 1 p = 0.016

表 6 は向上した能力と生活満足度の関連をクロス表でみたものである。向上した能力と生活満足度には関連があることがわかる。能力が向上したと思っている学生であるほど、生活に満足しており、逆に能力が向上してなかったと思っている学生ほど、生活に満足していない傾向がある。

表 7 性別と向上した能力と生活満足度のクロス表

		生活満足度		合計 (N)
		高満足	低満足	
男性	向上した	65.7	34.3	100 (105)
	変わらない・低下した	48.8	51.2	100 (43)
	合計	60.8	39.2	100 (148)
女性	向上した	74	26	100 (127)
	変わらない・低下した	62.9	37.1	100 (70)
	合計	70.1	29.9	100 (197)

$\chi^2=3.646$ d.f. = 1 p = 0.056
 $\chi^2=2.678$ d.f. = 1 p = 0.102

表 7 は男女別に向上した能力と生活満足度について見たものである。男性の場合は向上した能力と生活満足度には関連がみられているが、女性の場合は関連がみられていない。男性の場合は能力が向上した学生の方が生活に満足しており、能力が向上してなかった学生の方は生活に満足していないといえるが、女性の場合は、能力が向上しても向上しなくても生活満足度には変化がみられなかった。

この分析結果から、男性のパーソナリティが読み取れる。一般的に男性は何かを新しく作り出した場合であればこそ満足感が生れるといわれている。ここで、何かを新しく作り出したということの指標は「向上した能力」である。したがって、男性は能力が向上した場合、そこから成果を収めることができたと感じ、生活に満足している傾向がある。

3.5 おわりに

本稿の分析は、卒業生が大学生活を振り返ってみた時、どれほど生活に満足しているのかを確認することから始まった。生活に満足していると答えた学生が66%であり、先行研究と比べて比較的高い数値を示していた。次に男女別に生活満足度に差があるかどうかを確かめ、女性の方が男性より生活満足度が高く見えたが、統計的には差があるといえないことが明確になった。

生活満足度はどの要素によって影響を受けているのかを検討するため、①生活を送るにあたって一番現実なものである経済状態、②学生の今まで頑張ってきたものを証明する一番重要な変数である成績、③将来を保証するための向上した能力と生活満足度の関連を見つけた。そして、それらにおいて男女別で違いがあるかどうかを確認した。

その結果、経済状態と生活満足度に関連がみられたが、それは女性の場合であり、男性の場合は統計的に意味ではなかった。二つ目の変数である成績は生活満足度には弱い関連は見られたが、有意ではなかった。また男女別に差はないということが明らかになった。三つ目の変数である向上した能力と生活満足度に関連がみられたが、それは、男性のみであり、女性の場合は統計的に有意ではなかった。

以上の結果をまとめてみると、男性は能力が向上したと思っている学生であるほど、生活に満足しており、女性は経済状態が豊かである学生ほど、生活に満足していることが明らかになった。ここで、生活満足度に与える要因はジェンダーの視点からみると違いが目立つ。

したがって、男性と女性が生活に満足している要素に違いがあることが明らかになった。男性は、何かを新しく作り出した場合、必ず生活に満足しているが、経済状態は豊かでも豊かでなくても、生活満足度には変化がみられないだろう。しかし、女性は、安定性がある生活を求めるため、現在の実家の経済状態に影響を受けているのではないか。またそれによって安定性を感じるので、女性の場合は経済的に豊かである学生ほど、生活に満足しているが、向上した能力によっては、生活満足度に変化がみられなかっただろう。

最後に本稿を通して卒業生が大学生活を振り返ってみた時、全般的に満足していることが明確であり、どのような要素が生活満足度に影響を与えているのかとそれが男女によってどんな違いがあるのかが明らかになった。しかし、今回の調査は同志社大学社会学部卒業生を対象として行ったものであり、すべての大学において本稿と同じような実態が見られるかどうかは疑問である。また、卒業式という特定の日に行ったアンケート調査なので、満足度が極めて高いのも問題点の一つである。さらに、学生が大学4年を通して得た成績の評価をあらわすGPAは、生活満足度と関連がみられなかったのが予想のはずれである。それはどのような原因であるのかは、今後の課題である。

文献

牧野幸志・森裕紀子, 2001, 「子大学生活への満足度に関する教育心理学的研究(1): 学生は大学に満足しているのか?」『高松大学紀要』 37: 57-72.

長岡大学, 2006, 「大学生活の満足度・充実感・達成感」『平成 18 年度現代 GP 大学生活』
(<http://www.nagaokauniv.ac.jp/gp/gp-etc.html>)

浦川邦夫・松浦司, 2007, 「格差と階層変動が生活満足度に与える影響」『生活経済学研究』,
No.26: 13-30